

THE FLOOD-GATE AT USHIBUSE, NUMAZU.

牛臥大水門 (沼津)

絵葉書 (沼津) 牛臥大水門 THE FLOOD-GATE AT USHIBUSE, NUMAZU 明治40~大正7年 榊原公幸氏蔵
市内吉田町の榊原公幸さんに提供して頂いた古い絵葉書一枚を紹介します。

牛臥大水門として写されているのは、両側に石垣を積み上げた堤防に挟まれた水門です。上下する木製と見られる止水板が鳥居状の支柱に取り付けられており、それが6基で構成されています。中央の一枚だけが引き上げられて下から水が流れ出ており、箱型の蟹生け簀の様な物が置かれています。鳥居状の支柱は奥にもあり、二重構造で、両水門の間には木橋が架けられているようです。

フケと呼ばれていた塚田川の河口の潟湖のような低地に対し、海水の流入を防ぐために設けられ、高潮や高波などによる塩害を防止するものです。

ここは狩野川による河口への堆積の進展により、後背湿地となった低地からの吐水口となっていました。フケの奥には、汐入、塩満、浜田などの海水の流入を示す小字名が残されており、かつては塩害の被害が多かったことを示しています。塩場には塩田の計画もありました。



御幸橋 (昭和10年11月竣功) とせせらぎ橋

この水門は浜水門とも呼ばれ、後に鉄製の巻き上げ式の水門に改修されました。たぶん同時期に浜水門川(塚田川)に架けられたコンクリート製の橋は御幸橋と呼ばれ、昭和10年11月竣功と刻まれていました。この橋も令和3年に架け替えられ、水門も撤去されました。

下香貫にはもう一つ「みゆきばし」があります。昭和5年4月に竣功した、旧道の新川(新堀)に架けられたコンクリート製の「行幸橋」です。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話

ウマヅラ（ウマヅラハギ）を捕る仕掛け…ワッパ

獅子浜の網組である川口組は昭和50年（1975）頃に解散します。解散後、川口さんは個人でブリやアジやマダイの養殖を始めます。養殖を始めた当初、手があいた日の午前中に行っていた漁がワッパによるウマヅラ漁です。ワッパとは、輪のことを意味する言葉です。

それまで静浦地区にはウマヅラがあまりおらず、マダイの延縄に同じカワハギ科のマハズ（ハズともカワハギの地方名）がたまにかかるぐらいでした。マハズは食用として市場で値がつく魚でしたが、当時のウマヅラは食用魚としては扱われておらず、捕れてもすぐに捨てられるような魚でした。昭和50年頃、川口さんの父ら数名の漁師がワッパを使って漁を始めるようになります。このワッパを使うと今まであまり捕れなかったウマヅラがたくさん捕れることがわかってきました。その頃、獅子浜にあったカワハギ専門の干物業者がマハズだけではなくウマヅラでも干物を作るといふことで、このたくさん捕れたウマヅラを買い取ってくれました。また、マハズで美味とされる肝は刺身を食するときの醤油合わせる肝醤油が人気ですが、ウマヅラの肝でも遜色がないという評価が与えられるようになり、活魚として買い取る業者も現れるようになります。特に秋から冬にかけては肝が肥大化するため、ウマヅラの活魚は高値で取引されました。ウマヅラに新たな価値が見出され、簡単な仕掛けで大量に捕れることから当時の静浦地区の漁師の間でワッパによるウマヅラ漁ブームが起き、若い漁師もワッパを使うようになっていきました。

ワッパの仕掛けは、その名の通りワッパ（輪）の形状をした仕掛けです。川口さんの父がワッパによる漁を行い始めた頃の仕掛けは、直径1m程度の鉄環に網袋をつけたもので、鉄環の上に伸びる船から吊るすための紐には寄せ餌となるアミエビを詰める餌袋が取り付けられています。網袋の底は紐で縛っており、海中からワッパを曳きあげた時はカメ（魚籠）の上にワッパを移動させ、網袋の底の紐を解けば直接カメに漁獲物を入れられるようにしてあります。ウマヅラ漁ブームが起き、若い漁師たちも参入するようになると、効率を求めてワッパが大型化し、直径3m程度のステンレス環に網袋をつけたワッパを使用して漁をするようになりました。曳き揚げる作業もそれまで人力で曳き揚げていましたが、ウインチを使って曳き揚げるようになっていきました。

漁場ではワッパを海中に吊るしてウマヅラが集まってくるまで待ちます。餌袋に詰めたアミエビを散らす

ためにワッパを上下に振ることもあります。魚群探知機を見ながら魚群を確認できればワッパを曳き上げていきます。ウマヅラはマハズと違って大きな群れになる魚で、群れに当たれば大量に捕ることが出来ます。そのため、群れに当たらなければポイントを変えていきます。準備した寄せ餌が無くなるまでワッパの揚げ下げを繰り返し行います。

川口さんがワッパを仕掛ける場所は西浦地区にある養殖生簀のそばです。養殖生簀では養殖魚のための餌が撒かれるため、生簀の網から漏れた餌を目当てに多くの魚が集まってきます。ウマヅラも生簀に集まる魚の1種です。静浦地区にも養殖生簀はありますが、西浦地区の方が海底に岩場が多く、ウマヅラの餌となる海藻が生えやすいため、静浦地区よりも西浦地区の方がウマヅラを捕るためには良い環境でした。西浦地区やその周辺での漁獲が減ってくると、南伊豆の子浦まで出かけてウマヅラを捕りにいく漁師もいました。

川口さんの父がウマヅラを捕っていた頃は、春や秋の時期にワッパの漁を行い、鮮魚を干物業者に卸していました。川口さんは大型のワッパを使用してウマヅラを捕っていましたが、販売することが主目的ではなく、養殖生簀に放して網につく海藻や生簀に撒いた餌の余りを食べてくれる掃除屋として利用することが目的でした。活着ているウマヅラが必要なため、カメに海水を溜めてそこにワッパで捕らえたウマヅラを放って持ち帰っていました。成長したウマヅラは、自宅で天日に干して干物にしたり、肝とともに煮つけておかずとして食卓に上りました。

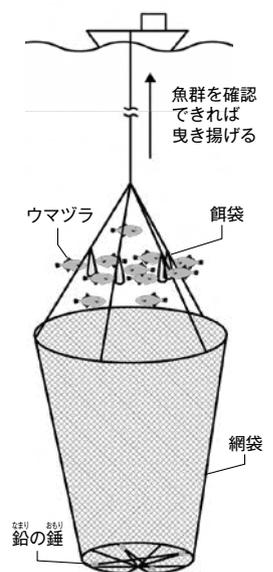
このワッパによるウマヅラ漁のブームは長続きせず、数年でウマヅラがあまり捕れなくなり、ウマヅラ漁は下火になってしまいました。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



写真：大型のワッパ

沼津市歴史民俗資料館所蔵



図：ワッパ操業図

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■香貫・我入道編 その10 上香貫の中核地域

●香貫郷の中心集落 「郡村高帳」によると上香貫村は元組・平方・三重郎新田（三十郎新田）と枝郷の小関新田とから成っていた。石高と家数は元組417石余・49軒、平方459石余・105軒、三十郎新田143石余・37軒、小関新田20石余であった。村高では1020石余、面積では102町2反4畝余で、田畑では砂地が多く、野土・真土と石とが混じり合っていた。腐植質の肥沃な野土や耕作に適する良質の土は僅かであった。

沼津藩領となった安永6年（1777）の「上香貫村明細帳」によると、田58町7反余、畑40町8反余、屋敷2町6反余、田方の内34町余は「両毛作」と記され、田地の等位からも米と麦などの二毛作が多かった。

下香貫村を合わせて「香貫二千石」と称される良田地帯であったが、これは寛永年間（1624～44）に植田内膳の尽力によって狩野川から疎水（内膳堀）を引き、早損に対処したことで生まれたと言われている。なお薪秣刈場は香貫山に出入しており、農業の合間に男子は薪取りを、女子は木綿の機織りをしていた。

弥生中期から古墳時代の遺跡を始め、古代・中世の中心集落が立地し、上香貫・下香貫一帯が中世には「香貫郷」として推移した。荘園制の下では上香貫が中心集落（本村・本郷・元組）と成り得た。本郷の南側、字殿ノ前や字御所海道が関連地名と言え、殿が靈山寺を指さないとすると、中世の殿・館とから土豪により築かれた館ないし御所（屋形）が字殿ノ前の地籍の東部にあったか。

元徳元年（1329）の書状によれば香貫郷の領主は京都の寺院で、当地に「政所」が置かれて管理されたという。この「政所」が御所（屋形）と直結する。字内山に靈山寺が造営され、その南側の地に御所が造成され、政所が置かれた可能性が高い。

北側の本郷に対して、香貫山の南側、下香貫の馬場・宮脇付近が副次的な中心地となっていた。なお字仕込は垣根で囲んだ館を指すものか。土豪による館址や大宮神社（後の楊原神社）・馬場が絡み合う。

●御幸町遺跡の周辺 沼津市民文化センターの建設に伴う発掘調査の結果、弥生中期から古墳時代・律令期にかけての集落遺跡として著名で、住居址は400基にも及ぶ。「香貫微高地」の砂礫堆の地形、標高約5mの地に位置し、周辺低地とは比高差2m程度である。弥生後期の小判型住居址が50基以上発見され、大型の住居址に青銅製の釧（プレスレット）や愛知県の特徴を持つパレススタイル土器が出土し、その他銅鍍など注目すべきものが多い。古墳後期の住居址は28基と少ないが、住吉町遺跡側に集落の中心と広がりが推定される。

全体の7割を占める律令期の住居址は、300基近く

発見され、平面が方形で柱穴をほとんど持たない。南側に位置する藤井原遺跡と連担して、1つの郷里の機能を形成したものと推定される。韃の羽口や鉄滓の発見から小鍛冶工房の遺構もあり、豊富な鉄製品、青銅製銚帯4点のほか、「玉」「厨」「寺」などの墨書土器の出土から、官衙周辺遺跡の性格を帯びている。特に須恵器の長頸瓶の底面に「一升」の文字の刻書があり、容器の容量からカツオの煮汁の可能性もあり、調味物を駿河郡衙へ供給する用途だった点は大変興味深い。

「香貫微高地」の砂礫堆においては、上香貫中原遺跡や藤井原遺跡・御幸町遺跡の分布と成立過程から、弥生中期を萌芽期としつつ、弥生後期の地形環境を背景として集落遺跡が急激に増加する。住吉町遺跡・下香貫山ノ根遺跡も合わせ、沖積地の拡大に伴って、狩野川沿いの自然堤防や砂礫堆の背後に広がる後背湿地を利用した水田耕作の展開が推定される。農業の可耕地が拡大して食料の確保が大いに進んだ結果、「人口支持力」を高めて、さらに居住地も砂礫堆や沖積段丘、香貫山の山麓屋簷などへ同様に広がりを見せていった。

なお古墳時代から律令期にかけて地形環境と遺跡の立地、集落の性格を考えるならば、狩野川が遺跡の西側、香貫地区の中央西寄りや南流していても不思議ではない。河川の自由蛇行や微地形を考えると狩野川本流沿い、字市場・外吉田・川瀬の自然堤防を形成する以前の低地部から、字槇島・三貫地や江川沿いで、河口部がラグーン（潟湖）的環境の牛臥であってさえも良い。ただし字川瀬の蓼ノ原や字西島の河道跡から、すでに江戸前期には狩野川が現在とほぼ変わらない位置を流れ、氾濫原一帯では流下の痕跡しかなかった。

中世には自然堤防の微高地上に吉田や市場の集落がすでに立地し、後背低地の湿地側に水田が成立しており、「狩野川中央貫流説」は否定する。ただし古代だと西寄りの流下と思われるが、はっきりしない。



上香貫平地部の小字分布と微地形

●玉造か鏡作の地 御幸町遺跡出土の墨書土器から、上香貫周辺は律令期の郷名が「玉造郷」の比定地に一段と強まった。墨書の「玉」は玉作・玉造の可能性が高い。また「厨」は厨家(厨房)を指して給食を担当する施設で、「寺」も日吉廃寺など古代の寺院を指し、共に官衙や機構に関わる施設の存在を予想させる。

ただし律令制下の郡の役所である郡家・郡衙は対岸の「駿河郷」の地に比定され、遺跡発掘が完了した結果、「駿河郡」の中心地も狩野川の北西側で、上ノ段遺跡一帯に郡衙が立地したことが濃厚となった。

承平年間(931~938)に成立した『和名類聚抄』掲載の駿河国駿河郡玉造郷の中心地もまた、狩野川より北側の可能が強い。平安前期の玉造郷は東海道の古道沿い、中世の「原中」宿の地で、玉作りの鑄型が出土した中原遺跡付近、大塚から原一本松辺が強まった。藤原宮出土

木簡に「□河評柏原里玉作部下□」があり、『和名抄』の「柏原郷」で『延喜式』の「柏原駅」とから、富士市柏原近くの原側の西寄りの地か。「玉作」は平安期に見える地名で、「玉作部」は古代の部民、工人集団のことであり。延長5年(927)完成の『延喜式』掲載の伊豆国田方郡の式内社に玉作水神社があるが、当香貫の地は駿河郡に属していたために三島市玉川付近か、該当地は不祥。

一方「鏡作」は平安期に見える地名で工人集団が重なるが、田方郡鏡作の地は不祥である。「鏡作郷」を香貫の地とする説もある。「依馬郷」比定の伊豆の国市北江間付近に対し、函南町柏谷近傍に求められるか。

なお黒瀬道沿いに高札場と「玉造神社」が絵図にもあり、江戸後期や明治期に比定地となる。また対岸の一里塚際にある「玉造の砥石」は砥石の擦痕ではなく、別な目的の石で富岳など風景画のような刻みが入る。

資料館からのお知らせ

社会科見学の様子

今年も沢山の市内の小学校の皆さんに社会科見学で資料館を訪れていただきました。

主に3年生の「昔の生活用具」の見学を目的としたもので、2階の生活用具の展示を学芸員の説明を聞きながら見学していただきました。

あわせて、昔の生活の道具の体験を行いました。コロナ禍の影響で感染予防のため、体験学習は3密を避けるために、野外で行うことができる火打ち石と火打ち金を使う「火起こし」に限定していますが、今後は感染状況を見ながら石臼による粉ひきや炭火アイロン、天秤棒などのメニューを増やして行く予定です。

「火起こし」体験はその日の天候や湿度の状態により左右され、皆さんが上手にできる時となかなか着火



社会科見学・火起こし体験の様子

がむずかしく、ほとんどできないと言うこともありました。ただ昔の人の苦勞を感じてもらえたと思います。

見学した皆さんからはお礼のお手紙が沢山届いています。ありがとうございました。



「社会科見学」生活用具の見学の様子

沼津市歴史民俗資料館だより

2023.12.25発行 Vol.48 No.3(通巻240号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp